

令和 3 年 6 月 10 日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K02683

研究課題名(和文) 談話標識とフィラーの多重生起による複合的手続きと対話形成に関する認知語用論的研究

研究課題名(英文) A Cognitive-Pragmatic Study of the Complex Procedures Encoded by the Multiple Occurrence of Discourse Markers and Fillers and Dialogue Construction

研究代表者

大津 隆広(Otsu, Takahiro)

九州大学・言語文化研究院・教授

研究者番号：90253525

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究により、BNC、Wordbanks、COCA、および映画のスク립トのどの言語データにおいても、談話標識とフィラーの組み合わせの中で、「第一次談話標識+第二次談話標識」「第一次談話標識+フィラー」「フィラー+フィラー」の組み合わせが優位であり、この順に組み合わせパターンの頻度が高くなることがわかった。こうした結果から、複合的な手続き的制約には、強化、緩和、調整の3つが顕著であり、こうした複合的な手続きは、認知効果の特定化、伝達態度の緩和、伝達態度の微調整、などの対人機能として対話を円滑にしていると言える。

研究成果の学術的意義や社会的意義

談話標識もフィラーも、発話の命題には直接関係しない、統語的にも意味論的にも使用が随意的な言語表現である。それらの組み合わせパターンが符号化する複合的な手続きの解明は、新たな認知語用論的研究となる。さらに、組み合わせパターンの習得は、日本人英語学習者にとって、文法知識だけでは説明できない対話形成能力及び対人レトリックに関わる重要な側面である。本研究は、推論への誘導、発話態度の緩和、思考への忠実さなどの伝達方法、話し手による聞き手との関わりを考慮した関連性志向の談話や対話の構成方法の習得に寄与する点で意義がある。

研究成果の概要(英文)：This research has founded that the combinations of “primary discourse marker and secondary discourse marker”, “primary discourse marker and filler” and “filler and filler” are dominant and that the frequency of combinations becomes higher in this order among all of the linguistic data: BNC, Wordbanks, COCA and movie scripts. These findings suggest that complex procedures encoded by the combinations of discourse markers and fillers are classified into strengthening, mitigation and modulation, and that these procedures activate interpersonal functions (specification of cognitive effects, mitigation of utterance attitudes, and fine tuning of utterance attitudes) to make a dialogue run successfully.

研究分野：認知語用論

キーワード：談話標識 フィラー 多重生起 複合的な手続き的制約 関連性理論

1. 研究開始当初の背景

談話標識 (discourse marker) やフィラー (filler) はともに発話の命題を構成するのではなく、それを含む発話の解釈に関わる推論に貢献するいわゆる手続き的意味を符号化した言語表現であると考えられている。基盤研究(C)「日英語の談話連結詞における手続き的意味と語用論的推論の研究」(平成19年度～21年度)、および著書『発話解釈の語用論』(九州大学出版会、2013年)の第4、5章において、英語の談話標識がコード化する手続き的制約を関連性理論の枠組みで分析を行なって以来、談話標識がそれを含む発話の解釈に制約を与える手続き的意味について研究を行ってきた。

(1) 言語データ分析における当初の背景

言語コーパスを用いた談話標識の実証的研究では、談話標識が発話内で単独で用いられる例のみを扱ってきた。しかしながら、言語データを検証する過程において、談話標識同士の組み合わせ、あるいは会話のデータにおいては、談話標識とフィラーの組み合わせが少なからず観察された。談話標識研究の第一人者であるBruce Fraserは、2nd American Pragmatics conference (UCLA, 2014)での講演“Combinations of Discourse Markers”、および論文“Combinations of Contrastive Discourse Markers in English” (*International Review of Pragmatics* 3, pp. 318-340, 2013)、“The Combining of Discourse Markers -- A Beginning” (*Journal of Pragmatics* 86, pp. 48-53, 2015)において、談話標識の同一のグループからの組み合わせと異なるグループからの組み合わせを議論している。しかしながら、同じ談話標識の組み合わせにはカテゴリーの制約と順番があるという指摘はあるが、そうした現象を引き起こす原因や組み合わせた場合の推論のタイプがどのようなものであるかなどについて明確な認知語用論的説明はなされなかった。

(2) 認知語用論における当初の背景

こうした組み合わせ現象に関して、Rouchota (1998: 116-117)は関連性理論の枠組みで、発話解釈に協力して貢献する場合には談話標識の共起が可能であると考え、「発話の意図された解釈に到達するために、2つ以上の談話標識が同一文内で使用される」と述べている。しかしながら、その理論的仮説は支持できるものの、実際の言語データに基づく多重生起のパターンやそれを引き起こす認知語用論的動因については具体的に例証されていない。

(3) 本研究を始める経緯

談話分析的手法によるFraserの現象の説明、Rouchotaの関連性理論による認知語用論的説明は、どちらも言語データをエヴィデンスとした認知語用論的研究としては不十分であると評価された。

2. 研究の目的

以上の背景をもとに、談話標識の組み合わせ現象に関して真の意味での認知語用論的研究を行うため、本研究の目的は、言語データに基づき、談話標識の組み合わせの認知語用論的動因を解明することである。さらに、談話標識相互の組み合わせのみならず、談話標識とフィラー、あるいはフィラー相互の組み合わせまで研究対象を広げ、発話解釈への複合的な手続き的制約について、対話の観点から捉え直すことを目的としている。

言語コーパスなどの対話データを用いた本研究の目的は次の2つに分けられる。

(1) 同一発話内で使用される談話標識およびフィラーの組み合わせにコード化された複合的手続きと組み合わせによる対人機能の考察

(2) 日本人英語学習者のための談話標識・フィラーの多重使用学習リストの作成

本研究では、英語の談話標識 (but や so のような第一次談話標識と however, nevertheless, in fact, therefore などの第二次談話標識) および、I mean, you know, you see, well, like などのフィラーのそれぞれが発話解釈に与える推論の違い、および同一発話内で使用されるそれぞれの可能な組み合わせが発話解釈に与える推論について、言語コーパスを用いて実証的に考察する。さらに、多様な組み合わせパターンが符号化する複合的手続き (complex procedure) やその手続きがもたらす対人機能を明らかにする。

3. 研究の方法

研究の方法は次の3つの側面から成り立っている。

(1) 関連する研究分野の理論的整理

談話標識とフィラーについて、中心的小説および周辺の研究に関する図書および学術論文を考察する。談話分析関連資料では、談話分析からみた談話標識とフィラーの役割、関連性理論関連資料では、関連性理論からみた談話標識とフィラーの役割、言語学・英語学関連資料では、言語学・英語学の中での談話標識とフィラーの位置づけ、さらに認知科学関連資料では、発話解釈と語用論的推論について理論的な整理を行なう。

(2) 言語データの収集と整理

小学館コーパスネットワークがサービスを提供する British National Corpus (BNC) と

Wordbanks、および COCA の spoken の言語コーパス、洋画のスク립トから、談話標識とフィラーの組み合わせについての言語データを収集し整理する。

(3) データの分析方法

第一次談話標識(but, so)、第二次談話標識(however, nevertheless, in fact, instead, on the contrary, on the other hand, therefore, as a result)、フィラー(I mean, you know, you see, well, like)を対象とし、同一発話内での談話標識およびフィラーの組み合わせパターンと同一発話内での談話標識およびフィラーの生起の順序、および関連性理論からみた組み合わせがもたらす発話解釈への推論について、以下の手順で分析を行う。

- (a) 収集した言語データについて、「第一次談話標識 + 第二次談話標識」「第一次談話標識 + フィラー」「第二次談話標識 + 第二次談話標識」「第二次談話標識 + フィラー」「フィラー + フィラー」の5つのパターンの使用頻度、およびそれらのパターン内での個々の組み合わせを分析する。
- (b) 多重生起のデータをもとに、単独の手続きをコード化した談話標識やフィラーが多重使用されることでコード化する発話解釈への複合的手続き、さらに、多重使用のデータが対話構成の優先事項をどのように具現化しているかを分析する。
- (c) 組み合わせのパターン、談話標識とフィラーの間の組み合わせの傾向、組み合わせにより生じる発話解釈への推論などについて、関連性理論の枠組みで理論化を行なう。

4 . 研究成果

(1) 言語データからの検証

表 1 . 第一次談話標 (PDM) , 第二次談話標識 (SDM) とフィラー (Filler) の組み合わせ例 (件数は、BNC/Wordbanks/COCA/映画のスク립ト、の順)

<u>PDM</u> <u>SDM</u> *	件数	<u>PDM</u> <u>Filler</u>	件数	<u>Filler</u> <u>Filler</u>	件数
<u>but</u> <u>nevertheless</u>	34/28/ 351/0	<u>but</u> <u>I mean</u>	482/832/ 1322/9	<u>well</u> <u>I mean</u>	730/72/ 41/26
<u>but</u> <u>in fact</u>	29/76/ 537/3	<u>but</u> <u>you know</u>	153/134/ 4985/45	<u>well</u> <u>you know</u>	412/745 /203/79
<u>but</u> <u>instead</u>	7/54/ 457/3	<u>so</u> <u>I mean</u>	187/437/ 476/3	<u>you know</u> <u>like</u>	297/450 /54/12
<u>but</u> <u>on the other</u> <u>hand</u>	23/68/ 695/1	<u>but</u> <u>you see</u>	153/134/ 290/10	<u>like</u> <u>you know</u>	296/13/ 130/12
<u>so</u> <u>therefore</u>	41/63/ 397/2	<u>so</u> <u>you know</u>	137/377/ 1253/30	<u>you know</u> <u>I mean</u>	284/554 /26/7
<u>so</u> <u>in fact</u>	26/49/ 50/0	<u>but</u> <u>like</u>	63/5/ 59/1	<u>I mean</u> <u>you know</u>	234/491 /63/29
<u>so</u> <u>instead</u>	2/9/ 80/0	<u>so</u> <u>you see</u>	29/39/ 246/8	<u>well</u> <u>you see</u>	186/152 /8/23
<u>but</u> <u>on the contrary</u>	21/63/ 3/0	<u>but</u> <u>well</u>	23/21/ 17/12	<u>I mean</u> <u>like</u>	78/9/ 59/11
<u>but</u> <u>however</u>	2/1/ 15/0	<u>so</u> <u>like</u>	29/0/ 50/2	<u>well</u> <u>like</u>	49/0/ 27/2
<u>so</u> <u>as a result</u>	3/13/ 72/0	<u>so</u> <u>well</u>	34/19/ 299/1	<u>I mean</u> <u>well</u>	50/59/ 7/4
* 頻度数が極端に少ない組み合わせについては省略している。				<u>like</u> <u>I mean</u>	44/5/ 12/0
				<u>like</u> <u>well</u>	38/2/ 68/0
				<u>you know</u> <u>well</u>	73/140/ 40/0
				<u>you see</u> <u>well</u>	24/8/ 1/0
				<u>you see</u> <u>I mean</u>	22/38/ 0/0
				<u>you see</u> <u>you know</u>	11/14/ 0/0
				<u>I mean</u> <u>you see</u>	8/22/ 12/0

<u>you see like</u>	5/0/ 18/0
<u>like you see</u>	3/1/ 2/0
<u>you know you see</u>	3/2/ 5/1

表2. 第二次談話標識(SDM)とフィルターの組み合わせ例
(件数は、BNC/Wordbanks/COCA/映画のSCRIPT、の順)

<u>SDM SDM</u>	件数	<u>SDM Filler</u>	件数	<u>SDM Filler</u>	件数
<u>however in fact</u>	1/0/0/0	<u>however I mean</u>	0/3/0/0	<u>on the other hand I mean</u>	0/4/0/0
<u>in fact however</u>	0/0/0/0	<u>however you know</u>	0/2/0/0	<u>on the other hand you know</u>	0/4/0/0
<u>in fact on the contrary</u>	0/0/0/0	<u>nevertheless you know</u>	0/0/0/0	<u>on the other hand you see</u>	0/1/1/0
<u>in fact therefore</u>	0/0/0/0	<u>nevertheless you see</u>	0/0/0/0	<u>therefore I mean</u>	0/0/0/0
<u>instead however</u>	0/0/0/0	<u>in fact I mean</u>	2/4/1/0	<u>therefore you know</u>	0/1/1/0
<u>instead in fact</u>	0/0/0/0	<u>in fact you know</u>	5/4/5/0	<u>therefore you see</u>	0/1/0/0
<u>on the other hand however</u>	0/1/0/0	<u>in fact you see</u>	0/0/2/0	<u>however well</u>	1/1/0/0
<u>therefore however</u>	0/0/0/0	<u>instead you see</u>	0/0/2/0	<u>in fact well</u>	1/5/1/0

(2) 言語データからの知見

談話標識とフィルターの組み合わせの優位性と複合的な手続き的制約

BNC、Wordbanks、COCA、および映画のSCRIPTのどの会話データにおいても、談話標識とフィルターの組み合わせの中で、「第一次談話標識+第二次談話標識」「第一次談話標識+フィルター」「フィルター+フィルター」の3つの組み合わせが優位であること、さらに「第一次談話標識+第二次談話標識」<「第一次談話標識+フィルター」<「フィルター+フィルター」の順に組み合わせパターンの頻度が高いことがわかった。

さらに、複合的手続きには、(a)のような強化、(b)のような緩和、(c)のような調整の2つがあることがわかった。

- (a) 強化(but nevertheless, but instead, so therefore, など)
- (b) 緩和(but I mean, but you know, so I mean, so you know, など)
- (c) 調整(well you know, I mean you know, you know I mean, you know like, など)

第一次の談話標識の but や so は推論的理解の方向を指し示す認知効果を制約し、第二次談話標識は高次表意(発話の命題形式を埋め込んだ形をした、命題へのコメントのような高次の記述)を構築することで、組み合わせにより第一次談話標識の認知効果がより特定の方向づけられることになる。例えば、“P instead Q”は“it is a replacement of P that Q”という高次表意を構築するが、これが「先行節(P)と後続節(Q)の矛盾と先行節の削除」という手続きを符号化する but と組み合わせられ“P but instead Q”となることで、but が符号化する認知効果の方向性が、言い換えという特定の方向へと強化されることになる。同様に、“P therefore Q”は“it is a logical consequence of P that Q”という高次表意を構築するが、これが「後続節(Q)は先行節(P)からコンテクスト的に結論を派生させる」という手続きを符号化する so と組み合わせられ“P so therefore Q”となることで、so が符号化する認知効果の方向性は、論理的な結論であるという表意を解釈に加えることで、さらに特定なものになる。

さらに、会話において、(a)のような手続きの強化よりも、(b)(c)のような手続きの緩和や調整による複合的手続きの方が圧倒的に多いことがわかった。(b)の緩和とは(a)の強化とは相反するものであるが、緩和は、違反した場合のコミュニケーションの不具合の度合いを考えた場合、話し手が守るべき対人機能としては優先順位が高いと言える。(c)の調整はフィルター同士の組み合わせによるものであり、話し手の心的態度の微調整する複合的手続きに他ならない。like(思考を忠実に言語化する)、I mean(後続節は先行節により符号化された思考である)、well(何らかの結論があることを暗示する)、you know(オープンに推意結論へ導かせる)はそれぞれ発話内容の理解に関わる手続きではなく、話し手の心的態度を符号化している。そのため、それらが組

み合わせることで、発話内容の伝達のされ方が細かく調整されることになる。

組み合わせによる対人機能

以上の複合的手続きをもとに、談話標識とフィラーの組み合わせが対人関係において果たす役割についてまとめてみたい。「第一次談話標識+フィラー」の典型的な組み合わせである“but you know” “but I mean” “but you see”などでは、“but”のみで相手の発話内容をストレートに否認するのではなく、意図する推意結論へ聞き手を誘導したり(“you know”)話し手の思考を表現しようとする誠実さを示したり(“I mean”)結論に至る前提を想起させる(“you see”)ことにより、発話態度の緩和という対人機能に貢献している。一方、頻度が最も多い「フィラー+フィラー」の組み合わせの中で典型的な例である“I mean you know” “you know like” “you know I mean” “well I mean” “well you know”などは、発話解釈への多重な推論を導くことで、聞き手の解釈に微調整を行いながら会話を構築する対人機能を反映していると言える。以上の3つの対人機能をまとめると次のようになる。

- (a) 認知効果の特定化(but nevertheless, but instead, so therefore, など)
- (b) 伝達態度の緩和(but I mean, so you know, など)
- (c) 伝達態度の微調整(I mean you know, you know like, など)

組み合わせにより生じる余剰的な処理労力は、発話解釈の微調整および円滑な会話の実現という認知効果に反映され、相殺されている。

残る問題への認知語用論的要因と今後の展望

3つの優位な組み合わせパターンに対して、「第二次談話標識+第二次談話標識」「第二次談話標識+フィラー」の組み合わせは皆無であった。これは、第二次談話標識が、高次表意(発話の明示的な意味)の構築に貢献するため、それだけですぐに関連性を見込みを満たすものであり、それ以上第二次談話標識を用いて発話の明示の意味を構築する必要や、フィラーを組み合わせることで解釈の調整を行う必要がないためではないだろうか。

談話標識とフィラーの生起の順序は、発話の意味解釈に関わるモジュール、その解釈が聞き手に受け入れられるよう調整・警戒するモジュールの順に活性化されるということを反映している。今後は、談話標識やフィラーの多重生起に関する広範囲の語用論的モジュールの階層性の研究へと繋げていきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 2件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Takahiro Otsu	4. 巻 134
2. 論文標題 Multifunctionality of After All: A unitary account	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Journal of Pragmatics	6. 最初と最後の頁 102-122
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1016/j.pragma.2018.04.007	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する
1. 著者名 Takahiro Otsu	4. 巻 なし
2. 論文標題 Multiple Occurrences of Discourse Markers and Fillers: A Relevance-theoretic View	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 ことばのパスペクティブ	6. 最初と最後の頁 393-404
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Takahiro Otsu	4. 巻 68
2. 論文標題 In Other Words and I Mean: Reformulation and Relevance	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 英語英文学論叢	6. 最初と最後の頁 15-33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Takahiro Otsu	4. 巻 53
2. 論文標題 Context Selection and Relevance	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 言語科学	6. 最初と最後の頁 19-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Takahiro Otsu	4. 巻 25:2
2. 論文標題 From Justification to Modulation: Similarities and Differences of After all and Datte	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Pragmatics & Cognition	6. 最初と最後の頁 337-362
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1075/pc.17028.ots	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Takahiro Otsu	4. 巻 70
2. 論文標題 Modulation in Comprehension: Relevance-theoretic View	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Studies in English Language and Literature	6. 最初と最後の頁 1-11
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 大津隆広	4. 巻 23
2. 論文標題 談話標識とフィラー：認知語用論的分析	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 言語文化叢書XXIII 講義「ことばの科学」2016-2018	6. 最初と最後の頁 18-43
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件)

1. 発表者名 大津隆広
2. 発表標題 In Other Words と I Mean 関連性理論の立場から
3. 学会等名 日本英文学会第64回九州支部大会シンポジウム「談話標識研究へのアプローチ」
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Takahiro Otsu
2. 発表標題 In Other Words and I Mean: Reformulation and Metarepresentation
3. 学会等名 4th International American Pragmatics Conference (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Takahiro Otsu
2. 発表標題 Multiple Occurrences of Discourse Markers and Fillers: Combination Patterns and Complex Procedures
3. 学会等名 16th International Pragmatics Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 大津隆広
2. 発表標題 日英語の談話標識と手続き的制約
3. 学会等名 日本英文学会第93回大会 (シンポジウム)
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------